

浮遊している、俺ら

美崎理恵

◆登場人物

岡（おか）	探偵
段原（だんばら）	団地の自治会長
佐渡村（さどむら）	旅する男

暗闇に一人の男が浮かび上がる。岡。全身黒の服。深々と被っている帽子も黒。

岡のM

子供の頃から夜が嫌いだった。暗い部屋の中で布団をかぶっていると、自分一人だけがこの世に生きているような気がして、怖くて、悲しくて、泣いた。人間って本当に死ぬのか。死んだおじいちゃんやおばあちゃんは本当に死んだのか。本当は生きてどこかにいるんじゃないか。いや、本当はみんな死んでて、俺だけが生きてるんじゃないか……。

生きてる人間を見たくて両親の部屋に行った。父は、「大丈夫。考えすぎだよ。おじいちゃんもおばあちゃんもちゃんと死んでるし、お父さんお母さんはちゃんと生きてる」と言い、母は、「はいはい、あなたが知っているものすべてが現実だから安心して寝なさい。おやすみ」と言った。そして二人の寝息。……死んだ？俺は両親の鼻の下にそっと手を当てた。

授業中も夜がやって来ることを思い、泣いた。担任の先生に「先生、夜が怖いんです。眠られないんです」と言うと先生は「岡くんは繊細だからなあ。もっと楽しいことを考えてみよう」と言った。俺は楽しいことを考えた。あんなこと、そんなこと、こんなこと。でも楽しいことを考えれば考えるほど、まるで砂糖の中に塩を混ぜればより甘く感じるように、夜がより怖くなった。

死んだらどうなるんだ？ 存在しないってどういうことだ？ 存在しなくなった俺はどこへ行くんだ？ 存在しなくなった俺は何を考えるんだ？ 何を感じるんだ？ いや、存在しないってどういうことなんだ？ 夜の闇がどんどんダークな世界に俺を引きずり込んでいく。どうして人は死ぬんだ。どうして殺し合うんだ。どうして戦争をするんだ。その果てにあるものは何だ？ 天上の世界か、地獄か、宇宙か……。僕の頭の中のダークがどんどん広がっていく……。そんな時、ある人が俺に言った。「味方につければいいよ。その中に身を置くのさ。そうすればきつと、怖くなくなる」

初夏の夜。上手に小さな木の椅子が二つ。下手、離れた所にベンチが一つ。

岡が上手の椅子に座っている。団地を見ながら手帳に何か書き込んでいる。

しばらくして上手から段原が来る。手にはごみ袋。下手のベンチに座り、岡を見る。またしばらくして、佐渡村が自転車を押しながら下手から来る。立ち止まり、団地を

『浮遊している、俺ら』

見る。

少しの間。

段原が佐渡村に気づく。

段原 (小さな声で) 佐渡ちゃん。

佐渡村 段原さん！

段原、人差し指を口に当て、佐渡村に歩み寄る。二人、声を潜めて、

段原 久しぶり。元気してた？

佐渡村 はい。

段原 移動中？

佐渡村 はい。

段原 どこにいたの？

佐渡村 島根に。

段原 お、いいねえ。で、これから。

佐渡村 どこ行くかなあ。

段原 いいねいいねえ。自由を満喫しているねえ。

佐渡村 段原さん何してるんですか？

段原 あいつ。(顎で岡を指す)

佐渡村 団地の人間？

段原 いや。最近ずっとああやって団地を見てるんだって。

佐渡村 こんな時間に？

段原 ああ。変なのがいるから見てくれって連絡があってね。

佐渡村 もしかしてまだ会長？

段原 そ。もうみんな何でもかんでも言ってくるからさあ。

佐渡村 頼られてるんですよ。

段原 でも今年で終わりだからね。やっと解放される。へへ。

岡、伸びをする。

『浮遊している、俺ら』

段原 お。

岡、再び団地を見る。と、何かに気づいたよう。手帳に書き込む。

段原 何してるんだろなあ？

佐渡村 僕、聞いてみましょうか？

段原 何聞くんだよ。

佐渡村 そのままですよ。何してるんですかって。

段原 直接？

佐渡村 間接的に聞くんですか？ どうやって。

段原 いや、そういうことじゃなくて、

佐渡村 何のためにここにいるんですか。

段原 こうやって見張ってるじゃない。

佐渡村 見張るだけ？ 気になりませんか？

段原 気にはなるけど、だからって――

佐渡村 任せてください。(岡に近づいて行く)

段原 (小さく) おい！

「大丈夫、大丈夫」とジェスチャーしながら佐渡村、岡の傍に行く。

佐渡村 こんばんは。

岡、驚いて佐渡村を見る。

佐渡村 何してるんですか？

岡 ……。

佐渡村 もうこんな時間ですよ？

岡 大丈夫。

佐渡村 何が大丈夫なんですか？

『浮遊している、俺ら』

岡 怪しいモンじゃないから大丈夫。

佐渡村 じゃ何してるんですか？

岡 仕事。

佐渡村 仕事って何ですか？

岡 (じつと佐渡村を見て、心配そうに) あんたこそ大丈夫か？

佐渡村 大丈夫ですよ。

岡 そう。じゃ、俺も、お前も、大丈夫。よかった。

佐渡村 え？

岡、団地を見る。佐渡村も団地を見る。

佐渡村 何かあるんですか？

岡 は？

佐渡村 団地に。

岡、不思議そうに佐渡村を見る。

佐渡村 はい？

岡 それは俺が聞きたい。

佐渡村 え？

岡 ……ま、いっか。

佐渡村 何が？

岡 OK。

佐渡村 え、何が？

岡 何だっけ？ 何の話してたっけ？

佐渡村 団地に何か用ですかっていう。

岡 そうだそうだ。君は？

佐渡村 え？

岡 君も団地に用があるんじゃないの？

佐渡村 ああ……。

『浮遊している、俺ら』

岡 例えば、誰かに会いに――

段原、慌てて会話に入る。

段原 こんにちは。

岡 ……は？

段原 すみません、ちょっといいですか？

岡 (佐渡村を見る)

佐渡村 なわけないでしょ。

岡 俺？

段原 はい、すみません。

岡 何。

段原 いや、こんな夜中に何してるのかなあとと思って。

岡 何で？

段原 ここ、団地の敷地内なんで……。

岡 立ち入り禁止？

段原 そうじゃないんですけどね。

岡 じゃいいじゃん。

段原 いや、そういうことじゃなくて……

岡 こいつは？

佐渡村 僕は元住人なので。

岡 じゃ、あんた、彼のことよく知ってるんだ。

段原 知ってます知ってます、よく知ってます。でも、あなたとは初めてですよね？(岡、段原をじーっと見る)ほら、言うじゃないですか。知らない人見たら疑ってかかれって、特にコミュニティの中では、こういう団地とか、学校とか。そういうの、私もあんまり好きじゃないんですけどね、でもやっぱり、知らない人は知らない人なので……(岡がじっと自分を見ていることが気になり)……何か？

岡 もしかして……

段原 はい？

岡 段原？

『浮遊している、俺ら』

段原 え？

岡 段原だろ。

段原 ……

岡、帽子を取る。

段原 岡！

岡 やっぱり！

段原 やっぱり！ 岡じゃないかと思ってたんだよー。

岡 嘘つけ。

段原 おいおい何年ぶりだあ？ お前、変わってないなあ。

岡 だったらさっさと気づけよ。

段原 ほらほら、そういうとこ全然変わってない。

岡 お前、変わったな。

段原 すぐ気づかなかったもんな。

岡 気づくかよ。お前の何見て気づけって言うんだよ。

段原 ほらほら変わってない。

岡 マジ段原かよ。

段原 段原段原、段原よー。

佐渡村 段原さん？

段原 あ、大丈夫。怪しい奴じゃないから。

岡 俺よりあんたの方がよっぽど怪しいよ。

佐渡村 は？

段原 お前、ここで何してるんだよ。

岡 お前こそ何してるんだよ。

段原 この団地に住んでるんだよ。お前は。

岡 見ての通りよ。

段原 何。

岡 探偵よ。

段原 ははは、やっぱり！ なんかそんな気がしたよ。

『浮遊している、俺ら』

岡 うそつけ。

段原 お前のことなら何でもわかる。

佐渡村 あの、探偵さんがここで何してるんですか？

岡 内緒。探偵ですから。口、堅いんです。

段原 何言ってんだよ。俺とお前の仲じゃないか。

岡 何だよ、俺とお前の仲って。

段原 教えてくれよ。何してた。

岡 (無視)

段原 団地に関係あるかないかだけでもさ。

佐渡村 団地見てたんだから関係あるに決まってるじゃないですか。

段原 (岡に) どんな関係？

岡 (無視)

段原 何調べてる？

岡 (無視)

段原 岡あ。

岡 言うわけないだろ。

段原 岡。いいか？ お前は探偵。探偵は情報が命だ。で、俺はこの会長。こいつは元住人。ということは、俺たちはこの団地の情報を持っている。ここから見ただけじゃわからないこと、あると思うぞ？ 何調べてる？ 言ってみろ。何でも教えてやるから。

岡 ……

段原 岡。俺たちは敵じゃない。

岡 (段原を見る)

段原 味方につけろ。

岡 ……浮気調査だよ。

佐渡村 浮気。

段原 浮気かあ……。どうやって調るの。

岡 記録するんだよ。

段原 何を。

岡 何時に帰宅して、何時に寝て、何時に起きる。電気がついたり消えたりするだろ？

『浮遊している、俺ら』

そういう時間をすべてね。

佐渡村 それでわかるんですか？

岡 生活パターンってだいたい決まってるのよ。それが崩れるってことは何か起きてる。浮気ではよく見られるパターンだ。

段原 誰を調べてる？

岡 それも聞く？

段原 真実を知るのに、ここに座ってるだけでいいのか？ 利用できるものはすべて利用すべきだろ。俺たちを利用してみる。今まで見えてなかったものが見えてくるかもしれないぞ？

岡 (溜息をつけて) 301だよ。

段原 301。

段原・佐渡村 田部ちゃん!?

段原 ないない。

佐渡村 絶対ない。

岡 何で。

段原 気の小さい男なんだよ。

岡 いや、奥さんの方。

段原・佐渡村 あー……

岡 なるほどね。ありがと。

段原 田部ちゃん、今、長期出張に出てるんだよ。

佐渡村 長期ってどのくらい？

段原 三ヶ月。そっかあ。田部ちゃんも人には言えない悩み、抱えてるんだなあ……

佐渡村 ちょっといいですか？

岡 何。

佐渡村 ずっと301を見てたんですよね？

岡 ああ。

佐渡村 だったらその下も見てますよね。

岡 201。

佐渡村 はい。

段原 佐渡ちゃん。花ちゃん、元気だよ。

『浮遊している、俺ら』

佐渡村 (微笑んで) そっか……。よかった……

段原 うん。頑張ってる。

佐渡村 ご飯、ちゃんと食べてるかな。あいつ、忙しくなると食べなくなるんですよ。

段原 大丈夫じゃない？ 元氣そうだから、うん。

佐渡村 あなたは？ 201。

岡 ああ、いいんじゃない？ 幸せそうだよ。

段原 (ちよつと焦って) うん、幸せだから大丈夫。

岡 時々喧嘩もしてるけどね。

佐渡村 喧嘩？

岡 時々ね。でもまあ、円満って言っているんじゃないの？

佐渡村 円満？ (段原に) 円満って、一人じゃ作れませんよね？

段原 はは……

佐渡村 喧嘩って一人じゃできませんよね？

段原 ……ね。

佐渡村 (岡に) ですよ？

岡 ……何？

佐渡村 僕、201に住んでたんです。

岡 過去に、だろ？

佐渡村 ……はい。

岡 だったらいいじゃない。

佐渡村 ま、いいですけど……いいです……

佐渡村、下手のベンチに座る。岡、段原、上手の椅子に座る。二人、声を潜めて、

岡 花ちゃんって彼女？

段原 ああ。

岡 ひきずるタイプ？

段原 あいつね、一つの所に居られないのよ。

岡 は？

段原 だから、あの部屋を出ざるを得なかった。好きな人がいてもずっと一緒に居られな

『浮遊している、俺ら』

いのよ。

岡 それは自分の意志？

段原 まあ、意志といえは意志だよなあ。

岡 好きだけど、部屋を出た。

段原 ああ。

岡 で、どこ行くの。

段原 旅。

岡 旅？

段原 旅に出るの。

岡 どこへ。

段原 その時の気分。行ってみて、気に入ればしばらくそこにいるらしいわ。

岡 ほう。

段原 でも一つの所で暮らすことはできないだろ？ だから時間が経てばまた旅に出る。

その繰り返し。その中でああやって帰ってくるんだよ。

岡 彼女に会いに？

段原 そ。

岡 面白いなあ。

段原 変わってるだろ？ お前とっしよだよ。

岡 名前は？

段原 あいつ？

岡 うん。

段原 佐渡村。佐渡の佐渡に村。

岡 下は。

段原 ミナオ。カタカナミナオ。

岡、佐渡村を見る。

段原 流浪の民なんだよ。定住しない。転々と渡り歩く。羨ましいよなあ。俺なんかこの

でっかい団地背負って動けないっていうのに。幸せな奴め。

岡 金は？

『浮遊している、俺ら』

段原 あるわけないだろ。工場でこつこつと働いて――

岡 あいつだよ。

段原 ああ。あいつはね、親が持ってる。(手でお金のジェスチャー) いるんだよ。幸運引っ提げて生まれてくる奴。一度でいいからあんな風に自由になってみたいよ。

岡 はたから見ると本人の幸せは違うからね。

段原 お前は？ 探偵儲かってんの？

岡 ンなわけないだろ。

段原 依頼ってどのくらいある。

岡 ぎりぎり食ってくぐらい？

段原 それでやってけるのか？

岡 やってけるからここにいんだよ。

段原 それならいいが。

岡 なあ、その袋、何。

段原 ああ、誰かがエレベーターの中に置いていきやがったんだ。生ごみ。

岡 だからだ！ さっきから何か臭いと思ってたんだよ！

段原 ごみステーションに持って行って言うのに言うこと聞かない奴多くてさ。どっかに投げときゃ会長が片づけてくれるって誰かが言ったとか言わないとか、ンなこ
とあるわけないだろ。困ったもんだよ。ちよつと捨てて来るわ。

岡 捨ててから来いよ。

段原、ごみ袋を持って下手に去る。

岡は、佐渡村を気にしつつも上手の椅子に座り、携帯で何か調べる。
やがて佐渡村が岡の傍に来て、団地を見る。

佐渡村 幸せなんですね。

岡 201？ 301？

佐渡村 意地悪ですね。

岡 君は201を見ている。俺は301を見ている。

佐渡村 ……

岡 幸せなんじゃない？

佐渡村 そっか……

間。

岡 ねえ、段原、何してんの？

佐渡村 何って？

岡 仕事。

佐渡村 僕がこの団地にいる頃は蓋をする工場に勤めてましたね。

岡 蓋？

佐渡村 いつも「蓋して来る」って仕事に行っていました。

岡 何だそれ。家族は？

佐渡村 奥さんが家を出てからは一人でしたけど。

岡 え？

佐渡村 浮気です。

岡 おっと……。どっちが。

佐渡村 奥さんが。それで段原さんショックで、一時引きこもってたんですよ。

岡 段原が引きこもり？

佐渡村 人に会いたくなかったんでしょね。夜中にこそそコンビニに行くんですよ。すごかったですよ。髪ボサボサ、髭ボウボウ。いつもどろんとした顔して口も利かない。

岡 あいつが……。どうやって戻ってきたの。

佐渡村 会長が回って来たんです、団地の。

段原が下手から戻って来る。今度は乾電池の入った袋を持っている。

段原 もうさあ、聞いてよ。

佐渡村 どうしました？

段原 乾電池は事務所の前箱だと言ってたのに何で守れないかなあ。回覧板にもちやんと書いてあるんだよ？ 乾電池は事務所の前につて。それなのにいつもごみステーションに置く奴がいて——ん？（とポケットから携帯を取り出して）何だ

よ、こんな時間に。(出て) もしもし。ああ、どうもどうも。え？ どの？ 三階？ 南階段？(三人、団地を見る) ああ……確かに。じゃちょっと待っててください、すぐ行くので。はい、そこで。はいはい。どうもどうも。(携帯を切る)

佐渡村 南階段、真っ暗ですよ。

段原 蛍光灯が切れたって。「旦那が帰って来るのに危ないから交換してくれませう？」って、優しいねえ。ちょっと行って来るわ。すぐ戻って来る。

段原、上手に去る。

岡 朝まで待ってって言えばいいのに。

佐渡村 それを言わないのが段原さんなんですよね。

岡 あいつ、人に頼られると弱いんだよなあ。文句言うくせに、はいはいって。

佐渡村 大変だと思えますよ、この会長。わがままな住人ばかりだから。

岡 期間は？

佐渡村 会長？

岡 ああ。

佐渡村 三年です。

岡 三年かあ。長いなあ。

佐渡村 会長が回って来るからって引越す人もいたらしいですからね。

岡 あいつ、すんなり引き受けたの、引きこもってたのに。

佐渡村 引き受けたって言うより、嫌だって言う機会を逃しちゃったっていうか、回って来たことすら知らなかったっていうか。

岡 気づいたら会長になってた。

佐渡村 そんな感じですか。

岡 やれやれ。

佐渡村 昔から仲の良かったおばあちゃんがいたんですけどね。

岡 段原と？

佐渡村 はい。

岡 何号室？

佐渡村 108。

『浮遊している、俺ら』

岡 108。(手帳を見て団地を見て)あの部屋、いつも一晩中電気がついてるけど。

佐渡村 まだ引きこもってるのかなあ。

岡 おばあちゃん？

佐渡村 いや、息子。

岡 息子？ 何歳。

佐渡村 五十。

岡 五十かあ……。で、ばあちゃんが？

佐渡村 助けを求めてきたんですよ。段原さんについていうより、会長にですかね。そしたら段原さん、わかるじゃないですか？ 自分が引きこもってるからその辛さとか、孤独みたいなの。それで何とかしなくちゃって思ったみたいで。

岡 引きこもりが引きこもりを助けた。

佐渡村 責任感強いですからね、お蔭で元気になったという。

岡 なるほどね。え、で君は？

佐渡村 はい？

岡 段原とはこの団地で？

佐渡村 はい。

岡 旅してるんだって？

佐渡村 段原さんから。

岡 さつき、ちよっとね。

佐渡村 え、もしかして僕を調べてる？ あ！ 田部ちゃんの奥さんの浮気相手って思ってる！？

岡 いいねえ。

佐渡村 違いますよ。

岡 わかってるよ。

佐渡村 じゃ何で僕のこと調べてるんですか。

岡 調べてないって。ただ、旅の人生っていいだろうなあと思って。

佐渡村 本当に？

岡 それにまあ、面白そうな奴だなと思って。同じ場所にとどまることができないんだって。

佐渡村 段原さん、そんなことまで喋ったんですか？

『浮遊している、俺ら』

岡 信頼してるからだろ。

佐渡村 自分でよくいえますね。

岡 あんたのことをだよ。

佐渡村 僕を？

岡 だから俺に話したんだよ。そうでなければ一々話して聞かせない。ま、俺も信頼されてるけどね。

佐渡村 その信頼の意味、わかりませんけどね。

岡、佐渡村、小さく笑う。

佐渡村 僕、飽きっぽいですよ。同じことの繰り返しも苦手です。

岡 ループしてるけどね。

佐渡村 はい？

岡 いや。子どもの頃から？

佐渡村 はい。あっちへふらふら、こっちへふらふら。落ち着きのない子供でしたね。ずっと同じ場所と同じ空気吸ってると違う空気吸いたくなって次の場所へと向かうみたい。学校なんて最悪の場所でした。いつも誰かが僕を見張ってるよう。めっちゃ辛かったです。だからそのうち学校行かなくなって、自転車で町をふらふらするようになって、隣の町へ、隣の市へ、その先へその先へ。行方不明者リストによく名前があがったそうです。そうしてずっと旅をし続けてきて、今でも旅をしています。

岡 でもここでは、花ちゃんと暮らしていた。

佐渡村 同じ場所には居ても三、四ヶ月なんです。もって半年かなあ。いや、半年も居られないなあ……。でもこの団地には三年居ました。

岡 すごいじゃない。

佐渡村 何がよかったですかね。今でもわかりません。

岡 そういうもんだ。

佐渡村 (団地を見て) 円満なんです。……

岡 いつまでも君を思って泣いてるよりいいんじゃない。

佐渡村 ……そうですね……

岡 会わないの？

佐渡村 会いません。

岡 会いたくないの？

佐渡村 会いたいけど、今会ってもまた別れるんです。そして彼女を傷つける。だから、最後の最後、もう出て行く時間がないってときに彼女と一緒にいられたらいいなって……。おじいちゃんになっちゃってますね。

岡、小さく笑う。

岡 俺も話していい？

佐渡村 ああ、いいですよ。

岡 昔、怖いものがあつたんだ。

佐渡村 怖いもの？

岡 夜。

佐渡村 夜？

岡 部屋の電気消して布団に入るだろ？ そしたら思うんだ。誰もいない。音もない。静かな夜。みんな眠っている。それなのにどうして俺は眠られないんだ。どうして眼が冴えるんだ。夜になると本当はみんな死んでるんじゃないか。生きてるのは俺だけじゃないか。夜って何なんだ。得体が知れない。もう怖くて怖くて、何で夜なんて時間があるんだらうって思ったよ。

佐渡村 (苦笑して) え？

岡 学校でも夜がくることを考えると悲しくて自然と涙が出るんだ。授業中の先生つかまえて、「先生、どうして毎晩夜が来るんですか？」とか言ったら先生困らせて、クラスのみんなには笑われて、病院にも連れていかれて、それでも全然よくなるなくて否が応でも夜はやって来て、ああ、俺はもう夜から逃れることができないって嘆いてたら中学校で段原に出会ったんだ。で、あいつ言いやがった。「味方につければいいよ。その中に身を置くのさ」それから俺は夜、眠らない。

佐渡村 え、全然眠らないんですか？

岡 ああ。

佐渡村 全然？

『浮遊している、俺ら』

岡 ああ。

佐渡村 面白い。

岡 知ってる？ 夜の街を歩くだろ？ そしたら出会うんだ。夜は昼に比べたら電波飛び交ってない。クリアなわけよ。みんな居心地いいわけよ。だからいるんだ。この世のものでないものが。ゾンビとか、吸血鬼とか、

佐渡村 え？

岡 怖くないよ。人の血は吸わない。自分の血を吸うんだ。自分の中で循環させて、命を保ってる。文明が進化すればあいつらも進化するんだ。ゾンビだって人を襲いたわけじゃない。襲われる前に襲ってしまうという習性なんだ。熊といっしょ。出会ってしまったら、ゆっくりゆっくり離れていけば大丈夫。ただ一つ違うのは音。熊は音で逃げるけど、ゾンビはほんの小さな音で反応してしまう。音がした方向とびかかる。これも習性。

佐渡村 はあ……。

岡 エスパーにも出会った。

佐渡村 エスパー。

岡 テレポーターションする奴、テレパシーを使う奴、透視能力を持っている奴、色々。この間は千里眼に出会った。

佐渡村 千里眼。

岡 彼らははるか遠く空の彼方を見つめて言うんだ。「ああ、今日も空を宇宙船が行き来してる。ああ、宇宙人が手を振っている」。

佐渡村 からかってます？

岡 その宇宙人にも出会った。見た目は人間と変わらない。俺や君と同じ姿。この町にも三、四人はいる。妖怪もいるし、AIロボットもいるし、幽霊もいる。霊魂だって漂ってる。

佐渡村 漂ってる。彷徨ってるじゃなくて？

岡 彷徨ってるなんて、こっち側の都合のいい解釈だよ。ダークだと思っているものが、ダークじゃない場合もある。世の中には色々な命が存在するんだよ。つまり、君みたいなのふらふら男がいても全然おかしくない。みんな世の中に紛れてるんだ。君も、俺も、紛れてるよ。

佐渡村 僕、紛れてますか。

『浮遊している、俺ら』

岡 何十億って人がいて、過去から現在まで地球上に存在した人、全部足したらすごい数だよ？ そのすごい数の人間が、この地球上に生を受けてきた。そしてその中に一人ぐらいは、ふらふら男がいてもおかしくないだろ。

佐渡村 (笑う) 確かに……。

岡 とね、俺が段原に言われたわけ。その中に一人ぐらいは眠らない男がいてもおかしくないだろ。

佐渡村 すみません、それ、僕も言われました。

岡 え？

佐渡村 一人ぐらい同じ場所で生きていけない人間がいてもいいだろうって、段原さんに。

岡 もう言われてた。

佐渡村 はい。

岡 なーんだ。

二人、小さく笑う。

間。

岡 このあとどうするの。

佐渡村 旅に出ます。

岡 いいねえ。

段原が上手から戻って来る。

佐渡村 おかえりなさい。

段原 (団地を見て) お、やっぱり新しい明かりはいいねえ。へへ。

岡 大変だね、会長は。

佐渡村 (団地を見ていたが) え……？

段原 ん？

佐渡村 ……すぐ戻って来ます。

段原 ああ。

『浮遊している、俺ら』

佐渡村、上手に去る。

岡 段原。

段原 ん？

岡 引きこもってたんだって？

段原 え？

岡 佐渡ちゃんに聞いた。引きこもりが引きこもりを助けたって。すごいじゃん。

段原 はは……、何をどう聞いたか知らないけど、助けられたのは俺ね。

岡 は？

段原 俺が助けられたの。

岡 108に？

段原 堀田さんね。

岡 堀田さんに。

段原 そ。

岡 堀田さんは？

段原 まだ引きこもってる。

岡 五十の。

段原 ああ。

岡 あ、そ。

段原 堀田のばあちゃんに何とかしてくれて頼まれたのにな、もうすぐ三年になるが、何もできてない。

岡 団地の会長は、医者でもカウンセラーでもないからね。

段原 藁にでもすがる思いだったんだよ。頼るところなくて、あんたなら、息子の気持ち、わかるだろうって……。もうさあ、あのばあちゃん、引きこもったら人生終わりみたいなこと言うんだよ。だから言ってやったよ。世の中には色んな人がいて、色んなスタイルで暮らしてて、早咲きもいれば遅咲きもいる、付き合いが上手な人間がいれば下手な人間もいる。

岡 夜が怖いって泣く者や、

岡 そ。

岡 ふうふう旅する流浪の民や、

『浮遊している、俺ら』

段原　そ。外に出られない者もいれば、中に居られない者も。だから、彼が彼として存在
することを、まずはよしとしよう。

岡　さすが元教師。

段原　それ言うな。

岡　なんで先生辞めたんだよ。いつ。

段原　お前が卒業して五年後ぐらいだったかな……。他の教師とそりが合わなかったん
だよ。

岡　それだけ？

段原　それだけが苦しかったんだよ。

岡　（小さく頷く）

段原　その時には色んな思いがあって自分を正当化してたが、でも今思えば、逃げてたん
だな。

岡　人の気持ちを逃がしてやるのうまいくせに。

段原　そうか？

岡　でも逃げたから今、俺と出会えた。

段原　ま、そうだな。佐渡ちゃんにも出会えたし、堀田のばあちゃんにも出会えたし。

岡　今、やり甲斐あるんだろ？

段原　それだよそれ。なあ、岡。

岡　何。

段原　俺ってさあ、すごい嫌な奴だよな。

岡　は？

段原　堀田のばあちゃんや息子が苦しんでる姿を見て、俺は思ったよ。「ああ、俺が会長
として何とかしなきゃ」って。そしたら俺の引きこもりはどこへやらと消えてった。
俺な、人の困ってる姿をばねにして自分のやる気を保てるような気がする。

岡　それいいたら医者や消防士はどうなるんだよ。みんな人が困ることによって成り
立ってるだろ。

段原　あれは仕事だろ。俺は、俺の精神面の話をしてるんだよ。

岡　何難しく考えてんだよ。

段原　俺は救われた。でも息子はまだ家の中だ。

岡　外に出られない奴もいるんだろ？　息子は今その時なんじゃないの？　段原が外

『浮遊している、俺ら』

に出ることができたから、息子を外に出してやりたいって思ってるんだろうけど、息子にとって今は、あの部屋の中が一番の居場所なんだろう？

段原

お前、大人になったなあ。

岡

今、段原がそう言っただろ。

段原

ちゃんと俺の話、聞いてたんだな。

岡

段原。時々教師面するのやめてくれる？

段原

ははは。

岡

まったく……。それより、蓋をする仕事って何？

段原

え？

岡

佐渡ちゃんに聞いた。どんな仕事。

段原

どんなんて、蓋をするんだよ。ベルトコンベアーに載って流れて来る部品の上にくうやって。(蓋をするジエスチャーをする)

岡

一日中？

段原

佐渡ちゃんにはできないね。あいつ、同じことの繰り返しは苦手だからな。俺は好きなんだ、単純作業。あれなんだっけ？

岡

何。

段原

ほら、ピアノの上とかでカチカチって、振り子みたいなの。

岡

メトロノーム？

段原

そ、それ。それが俺の中で流れるんだ。そうしながら色んなことを考える。(蓋をするジエスチャーをしながら)堀田のばあちゃんのこと。息子のこと。田部ちゃんのこと。201のこと。ごみを好き勝手に捨てる奴。自転車置き場に棲みついた猫。壊れかけてる集会所の鍵。奉仕作業の日程。壁の落書き。などなど。などなど……。

段原のジエスチャーが止まる。

段原

もうすぐ会長が終わる……。俺は蓋をしながら何を考えりゃいい？俺から会長を取ったら何が残る。俺は何者になる。

岡

段原は段原だよ。

段原

はは、かっこよく決めたな。

岡

かつて段原が言ったんだよ俺に、岡は岡だって。そのまま返すよ。

『浮遊している、俺ら』

段原 教え子に励まされる元教師。情けないよ。

岡 人には色々言っておきながら何だろうね、この自分に対するぐだぐださ。

段原 ぐだぐだ話を聞いてくれる奴がいて嬉しいよ。

岡 はは。

段原 お前、夜の世界でうまく生きてるのか？

岡 生きてるだろ。

段原 大丈夫なんだな。

岡 ああ。

段原 ご両親は。

岡 田舎。

段原 元気か？

岡 じゃない？ 何も言うことないから。

段原 そういうのは親が言うセリフ。連絡してみな。

岡 面倒だし、頼るの嫌だし、頼られるの嫌だし。

段原 相変わらずだな。でも親不孝だけはするな。

岡 だから教師面するなって。

段原 放っとけい。

岡 放っとくし。

間。

佐渡村が上手から戻って来て、段原を見る。段原と岡、佐渡村の存在に気づかず。

段原 岡。

岡 は？

段原 実は、嘘なんだ。

岡 何が。

段原 201の、花ちゃん。

岡 え？

佐渡村 さっき――

『浮遊している、俺ら』

岡、段原、驚いて佐渡村を見る。

佐渡村 201の窓が開いて、顔を出したんです。

岡 花ちゃん？

佐渡村 顔が全然違ってました。

岡 は？

佐渡村 顔が、全然違ってました。

段原 佐渡ちゃん、ごめん……

佐渡村 郵便受け見たら、名前も違ってました。

岡 え？

段原 出て行ったんだ。

佐渡村 いつ。

段原 ……佐渡ちゃんがここを出た、半年後。

岡 じゃ、あそこにいる円満な奴らは？

段原 ……その後、引っ越して来た夫婦。

岡 えっ……

段原 居ると信じて帰って来てるのにさあ……

佐渡村 ……

段原 彼女は彼女で、新しい生活を始めなきゃって思ったんだよ。ここにいると思えば
り過ぎて苦しくなるって。

佐渡村 本当に？ もう嘘はイヤですよ？ 嘘ってわかったら、一生段原さんを恨みます
からね。

段原 ……そんな、いつ帰って来るかわからないのに待ってられますかって。

佐渡村 ……

岡 そりゃそうだ……

佐渡村 ……

岡 吹っ切っちゃえ。

佐渡村 ……

段原 ……吹っ切っちゃえ。

佐渡村 (段原を見る)

『浮遊している、俺ら』

段原 ごめん……

佐渡村 ……そうですね……

岡 うん。

佐渡村 ふふふ……ははは！

段原 佐渡ちゃん……？

佐渡村 笑っちゃいますよね。あっちへふらふらこっちへふらふらしている僕が、彼女が引

つ越しただけでこんなに驚くなんて。

段原 そうだよ、自分はあっちこっちしといて、人にあっちこっちするなって、それはな

いよ。

佐渡村 そうですよね、ははは。

段原 そうだよ、この、我儘め！

段原、佐渡村、笑う。岡も小さく笑う。

佐渡村 あー、吹っ切れました。

段原 ホント？

佐渡村 ホントホント。なんか、僕の中ですべてが浄化されてったような気がします。気持
ちが更地になったような。(本当にすがすがしい笑顔)

岡 よかった。

佐渡村 今まではどこを旅しても、ここに帰らなきゃって思ってたんですよ。でもこれか
らはもう何も考えずに、行きたい時に行きたい所へ行ける。(大きく伸びをする)

ああー……

岡 うん。

佐渡村 じゃ、行きます。

段原 もう行くの？

佐渡村 はい。

段原 もう少しゆっくりして行こうよ。

佐渡村 (笑って) いつもはそんなこと言わないくせに。行きます。

段原 今度はいつ来る？

佐渡村 いつでしょうね。

『浮遊している、俺ら』

段原 俺はいるからね、俺に会いに来てよ。

佐渡村 ははは。

岡 これからどこ行くの？

佐渡村 んー、自転車で真っ直ぐな道をずーっとひたすら行きたい気分。何だか、いい風が吹いてるような気がします。風に乗るかなあ。

岡、頷く。

佐渡村 じゃ。

段原 気をつけてね。

佐渡村 はい。また。

岡 また。

段原 また来いよ。

佐渡村、笑顔で自転車に乗り、下手に去る。

段原 花ちゃんがいないとさっさと行っちゃったよ。

岡 段原。

段原 ん？

岡 俺、三週間前からここにいるんだけど、佐渡ちゃん、毎晩やって来て、その椅子からじっと団地見てるんだ。

段原 え？

岡 朝まで。で、明け方になると自転車に乗って去っていく。

段原 は？

岡 佐渡ちゃん、ループしてたんだ。

段原 どういうこと？

岡 佐渡ちゃん、死んでる。

段原 はっ？

岡 大丈夫。夜には多いんだよ。昼に比べてクリアだから。色んな者が現れる。

段原 え？

『浮遊している、俺ら』

岡 佐渡村ミナオ。検索したんだ。そしたら、(携帯を見せる) 日本鋼鉄産業の社長の息子なんだね。一ヶ月前に事故で亡くなってる。その頃からここに来てたのかもな。でも佐渡ちゃん、いたよ？

岡 旅してるんだよ。向こうの世界へ行ってもふらふらふら、楽しんでるんだよ。花ちゃんが気になって、戻って来てたんだな。

段原 あいつ、旅して天国まで行っちゃったか……。え、もう会えない？(佐渡村の去った方を見て) ああ！ 佐渡ちゃんいる。佐渡ちゃん！ あいつ、手を振ってるよ。佐渡ちゃん！

段原、しばらく手を振る。見送り終えて、

段原 流浪の民だもん。ずっと墓の中じゃ辛いわな。また来るかなあ。

岡、団地を見る。
間。

岡 それにしても段原にはでかい一軒家だなあ。

段原 はは、色んな人がいるよ。夜中に大喧嘩したり喚いたり。歌うったり。

岡 こないだ警察来てたよ。408。

段原 ああ。山田さんね。あそこにはよく来るんだよ、警察。

岡 (笑って) やべえ。

段原 ベランダから飛び降りる奴もいるんだぞ夜中に。もう五回飛んだ。

岡 もしかして210？

段原 そ！

岡 こないだ、ベランダに出てそんな素振りしてた。

段原 また飛ぶ気かよ！

岡 明後日ぐらいには飛ぶかも。

段原 あそこ二階だよ？ 二階から飛んでも骨折するだけだからやめとけってその度に言うんだけど、その度に向こうも、「月に向かって飛んだんです」って。

岡 はははは。

『浮遊している、俺ら』

段原 いい加減にしろよな。もし死んだら事故物件だぞ？

岡 三日前か、501、夜中に布団干してたぞ、深夜二時、パンパン叩いてた。

段原 501は叩くんだよ夜中に布団をパンパンパンパン。

岡 はははは。

段原 でも、こうやって文句を言うのも、もうすぐ終わりだ。俺は、蓋をしながら何を考
える……。岡。

岡 ん？

段原 お前は、生きてるよな。

岡 もちろん。

段原 本当に？

岡 ああ。

段原 本当に探偵か？

岡 (笑って) 何？

段原 夜と仲良くなるのはいいが、夜の闇に染まるなよ。

岡 ……ああ。

二人、団地を見る。

段原 ホタル族。まだいるんだな。(煙草を吹かすジェスチャー)

岡 暗闇で何考えてふかしてんだか。

段原 おい！ あれ、108！

岡 あ。

段原 笑ってるよ。

岡 もうすぐじゃない？ もうすぐ出て来るんじゃない？

段原 だといいなあ。

段原、岡、微笑む。

段原 明日、佐渡ちゃん来るかなあ。

『浮遊している、俺ら』

溶
暗

了